

祝 辞

学校法人西南学院理事長 齊藤 末弘



西南学院は、本年5月、創立90周年を迎えます。そして10年後、いよいよ歴史的な「百周年」という記念すべき年を迎えるのです。私自身、それまで生きていくかどうか、わかりませんが、この度、院長提案によって「西南学院百年史」編纂諮問委員会を立ち上げ、その成果を機関誌「西南学院史紀要」に発表、公開することは、きわめて時宜を得たことと、心から喜びたいと思います。これは院長の諮問組織ですが、数年後には正式の「編集委員会」を立ち上げることになるでしょう。

私の手元に今、企画広報課が提供してくれた「西南学院年史等一覧」があります。優れた先達が遺してくれた歴史資料、「村上寅次編『創立35周年記念』誌」（1951年7月刊・A4判21頁）を初め、その数は20冊に及ぶのです。磐石の『70年史』上下巻（1986年刊）を基礎として、30年（将来の10年を含む）間の歴史を如何に書き加えるかがこれからの課題になるかと思えます。歴史とは、「人間」の、しかも「客観的な」歴史に他なりません。1923（大正12）年2月、西南学院高等学部発行の雑誌「西南」（第四号）に、創立者C.K.ドージャー先生の注目すべき一文が載っています。「自由の精神を知れ——学院と社会は無縁ではない」（遺稿）という熱く「学生諸君へ」呼びかけたものです。

「学生諸君（略）（余は）常に『人全世界をもうくともその生命を失わば何の益あらんや』とキリストが言われたあの聖句が私の念頭に往来してこの尊い魂、この厳かな人格というものが諸君のうちに存在するのだという厳粛な考えが私の心の中に湧くのである。（略）我々は真の自由を得たいと熱望する。成る程これ程結構な叫びはな

い。けれ共、学生諸君、我等は常に真の人格を根底とし、完全に洗練された常識より出づる自由を得たのである。真に善を信じ、正義なりと確信する所に向って突進する意味において自由を叫びたいのである。」

これは高等学部には神学科が併置され、授業開始直前に発表されたものです。当時「自由の精神を知れ」という主張は、「西南よキリストに忠実なれ」という遺言と共に、学院の教育理念として脈々として継続してきたものです。しかし、「自由の精神」は1925（大正14）年4月、治安維持法公布と同時に弾圧されてしまうのです。

1941（昭和16）年、ドージャー一家が引揚げ、ミッションスクールへの弾圧も強くなって来ました。前年四月入学した波多江一俊（高文20回）さんは、退学して帰郷しようかと思った時、同級生たちの間で「波多野培根先生がござるけんの」と言い合って、卒業まで漕ぎ着けたエピソードは、ほんとうに忘れがたいものです。長年、大学事務長を勤めた中村保三氏も「温容のうちに毅然とした面影は誠に感銘深く忘れえぬものである」と、波多野先生の人々をひきつけて止まぬ人格的魅力について書いています。

以上、私は1951年刊「創立35周年記念」誌をめくりながら注目すべき歴史の一齣を紹介してみました。このように学校法人の歴史とは、「人間の歴史」に他なりません。建物の歴史ではありません。これは重要なことだと私は思います。

最後に、正史『百年』を編む場合、他の既刊本を検討することも大切です。私は元、編集の仕事をしたことがありますので、『70年史』を踏まえて気がついたことを三つ上げてみたいと思います。

1. 先ず予算と規模を決定すること。（頁立て・判型等）
2. バランスの取れた構成をすること。
3. 分担執筆のための『執筆要項』を作成すること。

以上気がついたことを書いてみましたが、いずれにしても「百年史編纂」という一大事業に向けて、この「紀要」が果たす役割は極めて大きなものがあります。担当の方々はもちろん、協力してくださる内外

の方々、どうか温かく見守り、ご協力を心からお願いいたします。そして今から10年後、立派な『西南学院百年記念史』が、めでたく完成することを祈って筆をおきます。